

ゲーテ研究
自然と認識

友田孝興

自然觀察においては

一と全とに留意しなければならぬ。

自然には内もなければ外もない、
内がそのままなのだ。

絶えず怠ることなく

この聖なる開かれた神秘を把握せよ。

この真実の仮象を、

この真剣な遊戯を享受せよ。

生けるものは一つの一にあらず、
それは恒に一つの多である。

Müset im Naturbetrachten

Immer eins wie alles achten ;

Nichts ist drinnen, nichts ist draußen ;

Denn was innen, das ist außen.

So ergreift ohne Säumnis

Heilig öffentlich Geheimnis.

Freuet euch des wahren Scheins,

Euch des ernsten Spieles :

Kein Lebendiges ist ein Eins,

Immer ist's ein Vieles.

一

ゲーテにおける自然認識の目標は、人間本性のよりよき理解にある。道元は『正法眼蔵』の「現成公按」において、「仏道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは自己をわするなり。自己をわするといふは、萬法に證せらるゝなり。萬法に證せらるゝといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落せしむるなり。」^①という有名な言葉を遺しているが、まさしくゲーテにおいても、自然の真理を認識するということは自己の本質を認識することであり、自己の本質を認識するということは、雑穢の知見思量を截断して自然の万象と感応道交することである。そして、感応道交することとは「恍惚」(ecstasy, Entzücken)となることであり、恍惚となるということは、文字通り、「自我を離れて立ち」(ex-stand)、「自己の我執を取抜して存在の閃きに遇う」(ent-zücken, zücken = zucken)ということに外ならない。つまり、自己と万法との相即融合によってこそ、存在は自らを開示するのである。ゲーテの自然認識は、このように自己と自然の万象とが感応道交し、自己が万法に証せられて行くが故に、自然を認識するということが、まさしく自己を認識す

るということになる。「人間は世界を知る限りにおいてのみ自己自身を知るのであり、自己の内においてのみ世界を、世界の内においてのみ自己を識るのである。」(Der Mensch kennt nur sich selbst, insofern er die Welt kennt, die er nur in sich und sich nur in ihr gewahrt wird.)^②というこの言葉が示しているように、ゲーテにおいては、主観なき客観も、客観なき主観も共に空疎である。主客を分裂させ、自然の認識が人間との連関を持たないことほど無意味なものはない。彼にあっては、自然が人間の内に置いたところの一切のものを、外界の実像に対応させ、それによって、内なるものを豊かな良心にまで高めることに人間の特権があるのであって、過去の偉大な業績を知り、未来の質と価値とを高めるために、自然と人間との生きた統一ある「実り豊かな認識」(fruchtbare Erkenntnis)^③を得ることこそが、真理を愛する者の現在の使命である。

我々はこれからの論述において、ゲーテ的自然認識法を究明し、彼の目指すこの人間との深い連関を持った「実り豊かな認識」とはいかなるものであるのかを考察してみた。

二

シラーとの値遇によって、カント哲学の影響を受けたゲーテは、『色彩論』において、主観と客観との徹底的な分離、及びその高次元における両者の統一、^④ということを物理学者に対して要求しているが、この要求の鋒先が対う窮極は、言を俟つまでもなく直観による主観と客観との統一にある。「客観と主観との触れ合うところに生がある。」^⑤(Wo Objekt und Subjekt sich berühren, da ist Leben.)^⑥のであり、「客観と主観との直接的合一」(unmittelbare Vereinigung von Objekt und Subjekt)^⑦なくしては、生きた形態の「内的全生命」(inneres Gesamtleben)^⑧に触れることはできない、というのがゲーテの主張するところである。

ゲーテの真理感情からすれば、光と眼、音と耳とが分離し難く調和の一体をなしているのと同様に、我々の精神も自然の諸力と不可分の有機的生命連関をなしている。つまり、自己(人間精神)と世界(存在一般)、器官(主観)と対象(客観)とは、不可分の極張力で結ばれている。

眼は自己の存在を光に負っている。無関心な動物的補助器官から、光は光と同じものに成るところの一つの

器官を呼び出すのだ。すると眼は光に拠って光のために自己を形成する。それは内なる光が外なる光を出迎えんがためである。

Das Auge hat sein Dasein dem Licht zu danken. Aus gleichgültigen tierischen Hilfsorganen ruft sich das Licht ein Organ hervor, das seinesgleichen werde, und so bildet sich das Auge am Lichte fürs Licht, damit das innere Licht dem äußeren entgegenreten.^⑨

ここに示されているように、客観と主観との間には、外なる「呼」の光と、それを出迎えんとする内なる「応」の光といった呼応関係が存在する。「ある未知の法則が客観内にあり、それが主観内の未知の法則に対応する。」(Es ist etwas unbekanntes Gesetzliches im Objekt, welches dem unbekannten Gesetzlichen im Subjekt entspricht.)^⑩のである。このような主観と客観との間の呼応対応関係の存在こそが、ゲーテにおける認識の成立根拠である。つまりもっと明確な形で言えば、

もし眼が太陽の質を持っていなければ、
どうして我々は光を見ることができよう。

Wär nicht das Auge sonnenhaft,

Wie könnten wir das Licht erblicken?^⑩

というこの言葉によって表明されているように、ゲーテにとっては古代のエンペドクレスと同様、「同じものは同じものによってのみ認識され得る。」(Das Gleiche kann nur vom Gleichen erkannt werden.)^⑪ もつともここでいう同じものによる対応関係というものは、固定した関係ではなく、生命法則の生動的関係であることはいうまでもない。要するに彼にあっては、人間と自然、主観と客観との間には同じ律動的生命法則が貫流している。従って、卵内の雛鳥の「啐」と、卵外の親鳥の「啄」とが同時に作用し合うことによって、新たな生命が産み出されるのと同様に、主観と客観とが緊密な感応道交によって、正しい対応関係にまで有機的に醸熟することこそが、認識の大前提なのである。

ところで、主観と客観とを有機的に醸熟させるためには、「聖なる畏怖」(die heilige Scheu)^⑫をもって自然の永遠なる分離と結合へ接近し、「愛と尊敬と敬虔との全力を挙げて、自然と自然の聖なる生命の中へ迫り入ること」(mit allen liebenden, verehrenden, frommen Kräften in die Natur und das heilige Leben derselben einzudringen)^⑬が必要となる。なぜなら、「無限なるものとの共

感」(Mitempfindung des Unendlichen)^⑭という愛の「世界敬虔」(Weltfrömmigkeit)^⑮の感情は、最大のものと最小のものとを相等しく抱擁し、個への愛に充ちた沈潜によって、全の「直観的概念」(ein anschaulicher Begriff)^⑯を結実させるためのエネルギーであり、それはまた、「全世界の予感」(eine Vorempfindung der ganzen Welt)^⑰によって、常に「美しい分離されない全体」(ein schönes ungetrenntes Ganze)^⑱を要請し、絶えず悟性による断片的概念に果肉を与え、それらを人間との連関において統一して行く働きを持っているからである。ゲーテは『ファウスト』の中で、「感情がすべてだ」(Gefühl ist alles)^⑲と言明するが、このことは、感性的なものの中には理性的なもののある同一の生命統一の価値が流れているのであり、感性的の純粋な豊かさこそ、理性的に最高なるものの体現される根本要素である、ということの表明に外ならない。要するにゲーテにとっては、感情というものは「人間に宿る自然の生産的な力」(produktive Kraft in der menschlichen Natur)^⑳であり、主観と客観とを醸熟させ、「イデーと経験とを「生産的想像力(構想力)」(produktive Imagination, produktive Einbildungskraft)^㉑の直観によって結合させるための根本母胎であって、真理という種子

は感情という花床がなければ開花結実を得ることはできない。愛に充ちた感情の純粹性こそ、想像力を生産的なものにし、固化した世界意識の先入見を打破して行くところの根源力なのであり、またこの宗教的な愛の敬虔感情こそ、最も純粹な心の平安によって主観と客観とを融合し、実り豊かな認識に到達させるための「手段」なのである。

三

さてそれでは、認識の対象となる自然とはいかなるものであろうか。彼にとっては、「自然は生であり、未知なる中心から認識し得ざる限界への連続である。」(Natur ist Leben und Folge aus einem unbekannten Zentrum, zu einer nicht erkennbaren Grenze.)^②つまり、主観と客観とを包摂する万有全体の基礎に一つのイデーがあり、これに従って「神は自然の内に、自然は神の内に」(Gott in der Natur, die Natur in Gott)永遠から永遠へと創造活動が続けている。そして「合一せるものを分裂せしめ、分裂せるものを合一せしむることこそ自然の生命である。」(Das Geeinte zu entzweien, das Entzweite zu einigen, ist das Leben der Natur.)^③

ここに述べたこの表象は、彼の自然に対する直観的意識

内容をよく表わしている。つまり彼にとっては、自然も自己と同じ有機的生命体なのである。「有機体においては、すべての部分は一部分に、各々の一部分はすべての部分に作用する。」(daß in einem organischen Körper alle Teile auf einen Teil hinwirken und jeder auf alle wieder seinen Einfluß ausübt)^④のであるが、まさしく自然こそ、部分と全体とが不可分の連関的交互作用の中に包括され、しかも、「原形」(Urbild)と「融通性」(Versattheit)、「普遍的原型」(allgemeiner Typus)と「多樣的可動性」(mannigfaltige Beweglichkeit)とが全体の中に統一されているところの有機体に外ならない。さてこのような「形成されたものはすべてまた変形される。」(Das Gebildete wird sogleich wieder umgebildet.)^⑤という有機的自然に対して、彼は現実的にはどのような認識方法でもって対処するのであろうか。それは次に挙げる彼の科学的自然認識に対する衝動をみれば明白となる。つまり、「生きた形態をありのままに認識に、その外部の見えかつ捉えることのできる諸部分を連関において把握し、それらを内部を指示するものとして取り上げ、かくて全体を直観においていわば支配せんとする衝動」(ein Trieb, die lebendigen Bildungen als solche zu erkennen, ihre

äußern sichtbaren, greiflichen Teile im Zusammenhange zu erfassen, sie als Andeutungen des Innern aufzunehmen und so das Ganze in der Anschauung gewissermaßen zu beherrschen) ⑤、これこそが彼の自然認識に対する方法論の簡明な表現に外ならない。

そこで彼は自己のこの衝動によって、現象を次の三段階に区分する。

- (一) 経験的現象 (das empirische Phänomen)
- (二) 科学的現象 (das wissenschaftliche Phänomen)
- (三) 純粹現象 (das reine Phänomen)

(一)の「経験的現象」は、いかなる人も自然の内において認めることのできるものである。つまり五官によって捉えられた感覚的現象である。この経験段階においては、多くの事実の考察と、その多様な事実の中にある共通な性格の発見が中心である。

(二)の「科学的現象」は、(一)の「経験的現象」を実験によって高めた知的抽象的現象である。いわゆる科学の立場がこれである。しかしゲートはこの段階に停留できない。生命体においては形成と変形が繰り返され、しかも量的変化は質的変化を同時に随伴するのであるから、現象形態を単に比量的に概観し、個々の対象を静的要素に固定するだけで

は、事物の本質を捉えたことにはならない。根本的には統一を保持しながらも、現象的にはより大きな多様性として現われる自然生命の真性は、単なる悟性的概念によって認識されるものでも、また個々の経験の集積から帰納され得るものでもない。つまり悟性による経験的事実の分析だけでは、事物の本質を捉えるに不十分なのである。なぜなら経験の内には現われない事例が存在するからである。科学的認識においては、悟性を判官とした定量的因果律的決定論というものが本質的に不可欠ではあるが、しかし科学の把握する像が、定性面を排し、因果律的定量面へのみ自己を限定するならば、それはあくまでも世界像の一面にしかすぎない。近代物理学の最大の不幸は、ゲートの指摘⑥によれば、健全な五官を働かせる限り最も偉大で精密な物理的実験装置であるところの人間というものから実験を切り離し、人工的な器機が自然の働きを制限しているにもかかわらず、その器機が示すものだけを自然と認め、器機によって証明しようとするところに存在する。物理学上の実験というものは、特に微視的世界においては、対象に対する激烈な干渉を意味するのであるから、実のところ、そのような「経験は経験の半分にすぎない。」(Die Erfahrung ist nur die Hälfte der Erfahrung.) ⑦この半分の経験をもつ

て普遍的世界像とするところに、悟性万能の定量科学の魔性が存在する。

そこでゲーテにおいては、(三)の「純粹現象」が問題となる。彼は

真なるものは神に似ている。それは直接には現象しない。我々はその顯現からそれを推知しなければならぬ。

Das Wahre ist göttlich: es erscheint nicht unmittelbar, wir müssen es aus seinen Manifestationen erraten.

と言う。つまり自然は「真実の仮象」でもって「真剣な遊戲」をしているが故に、自然の真理は「聖なる開かれた神秘」なのである。従って、経験の内には直接その事例を見出すことのできない「根本真理」(das Grundwahre)を、象徴的顯現から、「イデーに適した高い思考法」(eine hohe, der Idee gemäße Denkweise)によって推知しなければならぬ。認識が真に人間にとって実り豊かなものになるためには、悟性による経験的分析に加え、理性による理念的綜合が必要なのである。つまり、経験的悟性的分析を真に実りあるものにするためには、理性による理念的な「予感された統一」(geahnete Einheit)としての純粹

現象の構想が必要となる。

ゲーテにおける理性と悟性との相違は、理性は生成しつつあるものを、悟性は生成したものを頼みとする。

Die Vernunft ist auf das Werden, der Verstand auf das Gewordene angewiesen.

概念は経験の總和であり、理念は経験の結果である。かの總和を得るには悟性が、この結果を捉えるには理性が必要である。

Begriff ist Summe, Idee Resultat der Erfahrung; jene zu ziehen, wird Verstand, dieses zu erfassen, Vernunft erfordert.

という点にある。ここに示されているように、悟性というものは「生成したものを頼みとし、経験の總和としての概念を得る能力である。それは「真なるものを不真なるものから分割すること」(das Absondern des Echten vom Unechten)を旨とするが、彼が最も重視するところの流動機能の中に存在する生きた真性を捉えることはできない。それに対して、理性というものは「生成しつつあるものを頼みとし、形態によって現われる現存在を、生きた関係ある機能において洞見する」(Das Dasein, das sich

durch die Gestalt hervortut, in lebendiger, verhältnismäßiger Funktion erblicken) 能力である。つまり悟性は固定したカテゴリーに拠って経験内容を分析するのであるが、理性は常に感情を尊び、それと結合することによって、経験の総和としての科学的現象を経験の結果としての純粹現象にまで高め、概念を生命連関の中へ移入する。ゲーテにおいては理性と感情とが緊密な連関的浸透作用を営んでいるが故に、彼は理性を「不真なるものに対する自然的嫌悪感」(natürlicher Abscheu vor dem Unechten) としても規定するわけで、従って理性においては、カテゴリー自身が実り豊かなものへの生成昂進運動の中にある。要するに経験の総和としての悟性概念(経験的現象・科学的現象)だけでは実り豊かな認識とはなり得ない。経験的事実の内に基礎を持ちつつ、経験の結果としての純粹な理性理念(純粹現象)を構想することこそが認識にとって大切なことなのである。

経験は、まずすべての動物に共通なる部分を教え、そしてどの点でこれらの部分が相違しているかを教えるなければならない。理念は全体を支配し、發生的方法によって普遍的形象を引き出さなければならない。

Die Erfahrung muß uns vorerst die Teile lehren,

die allen Tieren gemein sind, und worin diese Teile verschieden sind. Die Idee muß über dem Ganzen walten und auf eine genetische Weise das allgemeine Bild abziehen.

一切の理念的なものは、現実的なものから乖離するならば、結局は現実をも自己自身をも食い尽すものであるが故に、「イデーは決して自由であってはならない」(Eine Idee darf nicht liberal sein) が、しかし「イデーを懼れる者は、結局は概念をも持つに至らなう」(Wer sich vor der Idee scheut, hat auch zuletzt den Begriff nicht mehr) 従って、自己を「最高理性」(die höchste Vernunft) にまで高揚し、絶えず現実の経験の場に立脚しつつ、純粹現象という「原型の普遍的イデー」(die allgemeine Idee eines Typus) を把捉することこそが、ゲーテにとっては、認識を真に実り豊かなものへと導くための「導きの糸」(Leitfaden) なのである。

経験的現象を科学的現象にまで高め、更にこれらの経験的抽象的現象を純粹現象によって統括する。そして最後にイデーと経験とを、高次の直観、即ち芸術的創造の根幹をなすところの「鋭い愛に充ちた眼」(der scharfe, liebevolle Blick) の有する「生産的想像力」『精密な感性的想像力』

(eine exakte sinnliche Phantasie) の創造的直観によって結合し、理性理念としての純粹現象を現実の場において確証する。これがゲーテ的認識法の全貌である。

四

さてそれでは、認識の窮極として直観に啓示される純粹現象・根源現象とはいかなるものであり、またいかなる意味を持つのであろうか。

根源現象

認識可能なものの窮極として理想的

認識されたものとして現実的

あらゆる場合を包含するが故に象徴的

あらゆる場合と同一的

Urphänomen

ideal als das letzte Erkennbare,

real als erkannt,

symbolisch, weil es alle Fälle begreift,

identisch mit allen Fällen.

ここに端的に表現されているように、理想的・理念的ではあるが、しかし主観と客観との有機的醸熟による啐啄同時の直観が把握するものであるが故に現実的である。しかも

あらゆる場合がここに濃縮され、ここからあらゆるものが演繹されて行く、つまり特殊形態をとりながら普遍を表出して行くが故に象徴的である。そしてこれは、種々の条件によってどれほど千様万態に変化しても、常に同じ根源現象であるが故に同一的である。

主観と客観とが合一し、主観の全精神諸力が集中されたところに見出される「根本経験」(Grunderfahrung)の本質としての根源現象こそは、「実り豊かな神の息吹の結実」(die Frucht des Anwehens eines befruchtenden göttlichen Odems)ともいふべきものであり、人間から融離した科学的現象に、再び人間との関りの中で生命を与えるところのものである。そしてこの根源現象は自然の生命を抹殺するところの単なる類表象としての普遍性をではなく、現実の特殊の内において、特殊を特殊として成立させるところの普遍生命を象徴するものであるが故に、これこそはすべての認識の窮極目標点となる。

ゲーテにおいては、認識は現実の経験から始まる。現実の現象はあくまで重んぜられなければならない。現実の経験的現象を離れた本質というものは無意味である。なぜなら、本質というものは、現実の特殊の内において生命を宿すからである。従って、彼にとっては、実験というもの

は、現実の概念的貧弱化を惹き起こすためのものではなく、実り豊かな根源現象を得るためのものでなければならぬ。自然は常にあくまで現実の特殊相において自己の本質を顕現しているものである。なぜなら、「Sein」は「Schein」なしには「Sein」たりうることができないからである。つまり

自然には核もなければ

殻もない、

自然は同時にすべてなのだ。

Natur hat weder Kern

Noch Schale,

Alles ist sie mit einem Male. ②

自然には内もなければ外もないのであって、内がそのまま外なのである。ただ生命体は、「一つの一」としてではなく「一つの多」として現われるが、しかし現実の場において根源現象を直観した者には、とりもなおさず現象それ自体が理論となる。生きた現実の特殊相において象徴的に顕現する普遍的理論、これが根源現象である。ゲーテは根源現象を象徴的であったが、その理由は、「特殊が普遍を、夢や影としてではなく、探求すべからざるもの生きた瞬間的啓示として表わすところに真の象徴作用があ

る。」(Das ist die wahre Symbolik, wo das Besondere das Allgemeinere repräsentiert, nicht als Traum und Schatten, sondern als lebendig- Augenblickliche Offenbarung des Unerforschlichen.) ③ かつである。

全体を喜ぼうと思ふなら

小さなものの中に全体を見なければならぬ。

Willst du dich am Ganzen erquicken,

So mußt du das Ganze im Kleinsten erblicken. ④

普遍を真に自己のものとするためには、現実の特殊の内に普遍を見なければならぬ。特殊は永遠に普遍に従属するが、しかし普遍は特殊においてこそ生命を得るのである。「私は永い間、普遍を求めて苦労してきたが、その結果、優秀な人間は特殊において何事かを成就するものであることを洞察し得た。」(Ich habe mich solange ums Allgemeine bemüht, bis ich einsehen lernte, was vorzügliche Menschen im Besondern leisten.) ⑤ と彼は述懐する。つまり「特殊を生き生きと擁む者は、同時に普遍をも保持する。」(Wer nun dieses Besondere lebendig faßt, erhält zugleich das Allgemeine mit.) ⑥ となるのである。

以上の考察から了得されることは、ゲーテの「実り豊かな

な認識」とは、根源現象を直観すること、つまり現実の生き生きとした特殊相において主観と客観との間を貫流するところの普遍生命を把捉することであったのである。そしてこの根源現象が主観と客観との緊密な合一によって直観されるものであるが故に、彼においては、自然を認識するということが同時に自己を認識するということになるわけである。従って彼にとっては、「実り豊かなもののみが真である。」(Was fruchtbar ist, allein ist wahr.)^⑧のべあり、「真なるものは促進する。」(Das Wahre fördert.)^⑨人間生命を実り豊かに促進するものが真理であり、主観と客観との間の「美しい関係」(schönes Verhältnis)^⑩の直観こそが「実り豊かな認識」(fruchtbare Erkenntnis)なのである。

註

一① 岩波『日本古典文学大系 81』『正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』

一〇二頁

② W. A. II, 11, 59.

③ MuR., 562.

一④ Farbenlehre, Didaktischer Teil, 716.

⑤ Zu G. Parthey, 28. August 1827

⑥ An Schultz, 18. September 1831

⑦ H. A. 13, 26.

⑧ H. A. 13, 323.

⑨ MuR., 1344.

⑩ H. A. 13, 324.

⑪ Zu Eckermann, 11. März 1828

⑫ H. A. 14, 36.

⑬ MuR., 573.

⑭ MuR., 1139.

⑮ H. A. 8, 243.

⑯ H. A. 12, 53.

⑰ H. A. 7, 257.

⑱ H. A. 12, 43.

⑲ Faust I, 3456.

⑳ MuR., 647.

㉑ H. A. 7, 309.

㉒ W. A. II, 6, 302.

㉓ H. A. 13, 35.

㉔ H. A. 13, 31.

㉕ H. A. 13, 488.

㉖ J. A. 39, 163.

㉗ H. A. 13, 56.

㉘ H. A. 13, 55.

㉙ H. A. 13, 25.

㉚ MuR., 706.

㉛ MuR., 1072.

㉜ MuR., 619.

㉝ J. A. 38, 118.

㉞ H. A. 13, 245.

- ⑤ H. A. 13, 232.
⑥ MuR., 555.
⑦ MuR., 1135.
⑧ J. A. 40, 171.
⑨ H. A. 13, 243.
⑩ J. A. 40, 171.
⑪ H. A. 13, 172.
⑫ MuR., 216.
⑬ MuR., 128.
⑭ Zu Eckermann, 13. Februar 1829
⑮ H. A. 13, 172.
⑯ H. A. 13, 235.
⑰ H. A. 2, 165.

- ⑱ J. A. 39, 374.
⑲ MuR., 1369.
⑳ MuR., 768.
㉑ Zu Eckermann, 18. April 1827
㉒ H. A. 1, 359.
㉓ MuR., 314.
㉔ H. A. 1, 304.
㉕ MuR., 229.
㉖ MuR., 279.
㉗ H. A. 1, 370.
㉘ MuR., 596.
㉙ H. A. 12, 102.